市川学園第三教育センター通信

実況中継「土曜講座」

第１１号　　令和７年１２月１９日発行

市川学園　11 月 22 日の土曜講座　於、國枝記念国際ホール

山田　尚史　先生

「生成 AI で変わる世界―先端技術が拓く未来の生き方・働き方―」

マネックスグループ（株）取締役兼執行役

山田尚史先生の紹介

1989年生まれ　神奈川県横浜市出身

開成中学校・高等学校を卒業後、東京大学理科一類から工学部に進学、松尾研究室でAI技術を学ぶ。

2011年に弁理士資格を取得し、ソシデア知的財産事務所に入所

2012年、株式会社AppReSearch（現PKSHA Technology）を共同創業し、同社代表取締役に就任

2021年6月よりマネックスグループ取締役、2022年4月より同社取締役兼執行役

2023年10月に「第22回『このミステリーがすごい！』大賞」大賞を『ファラオの密室』で受賞

主な講義内容の紹介

マネックスグループ（株）取締役兼執行役を務める山田尚史先生により「生成 AI で変わる世界―先端技術が拓く未来の生き方・働き方―」という演題でご講演をいただきました。山田先生が学ばれた AI に着目し、その性能と変遷を歴史的文脈から概観し、最新動向をわかりやすく解説されました。人は AI に何を委ね、何を手放さないべきかということ。それにより、社会と人の生き方はどう変わるべきか考えさせられる内容でした。生成 AI の衝撃と現状について、 生成 AI は従来の技術と比べ物にならない速度で社会に変化をもたらしており、その影響は甚大です。ビジネスから日常生活まで、あらゆる領域に変革が進行中です。働き方の未来（仕事の消失と創出）は 定型的な作業や単純な情報分析は AI に代替されやすくなります。一方で、人間特有の創造性、感情労働、高度な判断力を伴う仕事は残り、需要が高まります。AI を開発・活用する新たな職業も生まれています。生き方の未来（人間の役割と価値の再定義）について AI の進化は、私たちに「人間だからこそできることは何か」を問い直す機会を提供します。自己満足で終わらない「学び」のサイクルを構築し、自律的なキャリア形成が重要になります。生成 AI は、私たちが直面する社会課題を解決し、豊かな未来を築くための強力なツールです。重要なのは、AI に仕事を「奪われる」というネガティブな視点ではなく、AI と人間が「共存」し、互いの強みを活かし合う新たな関係性を築くことです。未来の生き方・働き方を主体的に形作るためには、私たち一人ひとりが AI 技術を理解し、倫理観を持って活用していく姿勢が求められます。

受講者の感想

・今回の講座では、AI がヒトより安いコストで賢いことができるため AI がヒトの働き方を根本的に変える可能性があるということを学びました。特に、生成 AI は今まで人間にしかできないこと言われていた難しいことを簡単にこなせるため、付加価値の知的労働を代替えしていくということが印象に残りました。しかし、このように万能な生成 AI の導入が他の国々より後れを取っていると知りました。この背景として他の国とは異なる文化が関係しているとわかり、こういった影響で日本の生成 AI の普及率が約 4 分の 1 に留まってしまい GDP の成長変化があまりないことに繋がると思いました。また、このように変わりゆく世界で AI によって本質的でない作業が効率化されたり自分のできないことを強化してくれる一方で学習能力向上の意欲が落ちる恐れがあるため、ＡＩとうまい具合に付き合っていくことが大切だと考えました。（1 年女子）

・今日、ＡＩにより様々な職業が失われつつあり、そのことに興味と不安を抱きこの講座に参加しました。生成ＡＩの概要についてや生成ＡＩが発達している今にふさわしい生き方を学ぶことができました。自分の欲望が、本物の欲望ではなく、模倣によって生まれた欲望だと説明され、大きな驚きとともに、確かにそうかもしれないという納得も生まれました。そう思うと、確かに自分のことを自分はあまりよく分かっていないかもしれないと思いました。もっと自分の欲望を追求して自分が夢中になれることを探し、自分のことを理解してあげたいと思いました。そして、この世の中での生き方、働き方を見つけたいと思います。（2 年女子）

・前半では、ＡＩの進化と歴史、今後の展望について語られ、これまで何となくとしか知ることができなかった。現在までに起こった状況の変化を明確に捉えることができた。特に、日本は海外とリスクの取り方が異なる（日本は少しの時間を失うことも許さないのに対し、海外は新製品の発展のために時間を失うべき）ためＡＩの導入が遅れているという話は興味深かった。後半では、ＡＩの人の活動への参入といった視点から、自己理解と確立の重要性が強調された。私はこれまでＡＩを使うという選択を何回かした、あるいは無意識的にＡＩを使用してきたが、どのようにＡＩ作業と自分の創作を線引きすべきかわからなくなることがあったので「濃い欲望を突き詰める」という話に感銘を受けました。今後の人生に活かそうと思います。(5 年男子)

（文責：山本　孝裕 先生）